

日本病院会全国図書館研究会

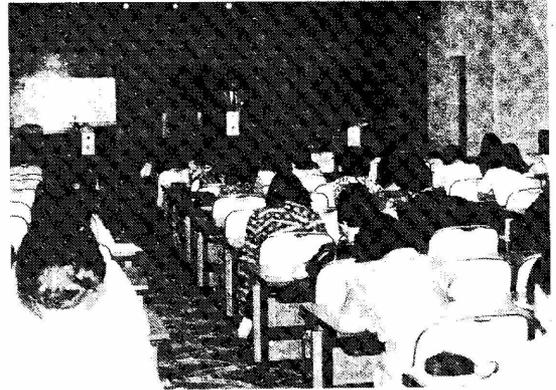
日 時：1992年9月3日～9月4日

会 場：兵庫県民会館

毎年開催される日本病院会主催の「全国図書館研究会」(以下、全国研)の本年の開催地は関西でとの要請を受けて、今年度の研修部の活動はまず全国研の会場探しからスタートした。今年は図書館情報サービス研究大会が京都市(山科)で開催されたこともあり、比較的交通の便利な神戸市元町の兵庫県民会館を会場に決定した。

その後はこれまでの全国研の例にならって研修部会と幹事会においてプログラムの企画、講師交渉を行った。

今回のメインテーマは「資料の保存」とし、限られた図書館のスペースで資料をいかに保存すべきか、また図書館における「資料の保存」につい



てどう考えられているか、ということの問題にしてみたいと考えた。

プログラム

・第1日目

開会挨拶

(社)日本病院会常任理事 北村 行彦
 近畿病院図書館協議会会長 白方 誠彌
 (社)日本病院会図書館研究会委員長
 石澤 實枝

特別講演「臨死の読書と回復期の読書」

講師：評論家 鶴見 俊輔
 司会：淀川キリスト教病院病歴図書館部長
 船戸 正久

講演「図書館における資料保存の考え方」

日本図書館協会資料保存委員会委員長
 二宮嘉須彦

講演「中国四国地区における

バックナンバーの分担保存制度」
 宇部短期大学教務課長 屋馬 逸郎

・第2日目

講演「ADONISについて」

(株)伊國屋書店 国際情報部
 関西オンライン課課長 平山 恵三

講演「著作権法について」

大阪府立夕陽丘図書館 前田 章夫

シンポジウム

「病院図書館における資料の保存と廃棄」

座長：京都南病院副院長 戸津崎茂雄

①資料保存上の諸問題

日生病院 千住とも子

②資料の分担保存

大阪回生病院 加島 民子

③資料の廃棄(廃棄基準を含む)

浜松赤十字病院 飯田 育子

④資料の保存方法の動向

西淀病院 前田 元也

〔第1日目〕

哲学者であり、評論家としても著名な鶴見俊輔先生を招聘しての特別講演では、ご自身の体験や具体的に書籍や作家の例を紹介しながら哲学的な思索から「臨死の読書」についての講演をされ、深い感銘を受けた。

次いで講演「図書館における資料保存の考え方」では、いま図書館界で問題となっている酸性紙のむろさきについてもふれられて「資料の保存」の責任を再認識させられた。頻りに利用されなくなった資料でも「保存」しておくのが図書室の役目であることは当然であるが、各図書室でそれが果たせない場合は分担して「保存」する方法が考えられる。昼馬逸郎氏の講演「中国・四国地区におけるバックナンバーの分担保存制度」では、これから病院図書室で分担保存を実施していく上での多くの示唆を受け、ネットワークの必要性を感じた。

〔第2日目〕

新しい、これからの「資料保存」とも考えられる「ADONISについて」の講演は、医学・薬学関係 400 誌の一次資料全文のCD-ROMの紹介で、情報検索と原報入手ができるものとして注目される。

病院図書室における複写サービスではいつでも著作権の問題が懸念されてきたが、今年の「財団法人 日本複写権センター」の発足はすべての図書館サービスに影響を与えるものと予測され、特に病院図書室では危機感すらある。「著作権法」についての知識と病院図書室活動の関係を考えていく上で、前田章夫氏の「著作権法について」の講演は非常に関心を持って聴いた。

午後からのシンポジウムは、「病院図書室における資料の保存と廃棄」と題して行われた。まず座長から、規模の異なる2病院の事例から医学雑誌の利用率を発行年別に比較した結果、いずれも過去5年間で51～56%、15年間では88～89%を占めていることが報告された。

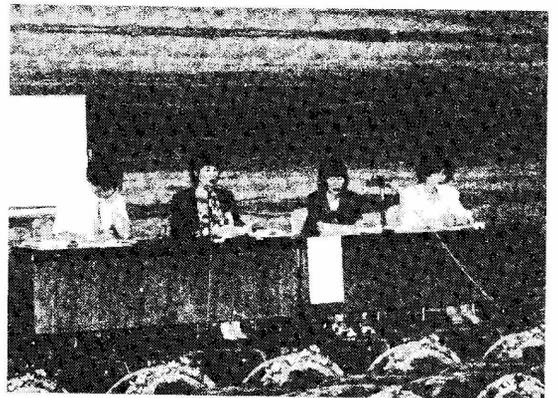
次いで5人のシンポジストからの報告で、(1) 千住氏からは病院図書室における資料保存上

の問題はスペースの限界と資料の寿命であること、(2) 加島氏は現在の当協議会での分担保存の取り組みについての方法と経過について、(3) 飯田氏は資料を廃棄するに際しての基準と手続きを、最後に(4) 前田氏が図書室における保存の重要性を述べ、デポジット・ライブラリーの構想を提案した。報告の後、各シンポジストへの質疑応答が活発に行われ、この問題に対する参加者の関心が非常に大きいことが窺えた。最後に座長の全体のまとめがあり、時間を惜しみながらシンポジウムを終了した。

9月3、4日の2日間にわたっての今年の全国研は記録的な暑さにもかかわらず、73名の参加者を得て成功裡に閉会した。初めての神戸での開催も好評で、参加者のアンケート結果でもプログラムの各テーマが印象に残ったものとして挙げられていた。また、「臨死の読書」や「シンポジウム」には非常に多くの人から感銘と関心の言葉がよせられ、企画を担当したわれわれの役目も何とか果たせたように思う。

全国研も回を重ね、この研究会の運営に直接関わっておられる委員会のメンバーもさらに充実された。今後の発展を大いに期待してやまない。

(文責・山室真知子・研修部)



シンポジウム：左から前田氏、飯田氏、加島氏、千住氏